

日本酒造史研究会設立趣意書

昭和 59 年 11 月 17 日

日本酒造史研究会

酒の歴史は、人間の歴史であり、世界各地で様々のすぐれた銘酒が生みだされており、日本酒もその一つとして位置づけられるものである。

酒は人間社会に欠かせないものである。従って、この酒を対象にした学問は、自然・人文・社会の諸科学を総合した学際的な「日本酒学」とよべる。しかもこの「日本酒学」は、世界の中の日本酒を対象とすることで、優れて国際的な学問でもある。

なかでも最先端技術としてのバイオテクノロジーの領域における世界に誇るべき数多くの成果は、長い優れた伝統をもつ日本酒造技術から醸成されたもので、これの歴史的研究は将来の技術に関する明確な展望を得るためには絶対に欠かせない。と同時に国際的に高い関心をもたれている日本酒に対する正しい理解を深めさせ、豊かなものとすることは言うまでもない。

このような事情にもかかわらず、貴重な史料が急速に散逸し、さらには消滅しつつあるとき、日本酒造史の研究を関係者が協力し、精力的にしかも体系的に実施することは、いまや緊要な社会的要請になってきているばかりか、今日直ちに調査研究を開始しないならば、その時機を失う恐れすらある。

われわれは、これらの諸点に十二分に配慮しながら、なかでも日本酒造史に特別の関心をもって、この分野の調査研究を推進し、その成果を社会に還元し、貢献したいと念願し、ここに日本酒造史研究会を設立する。

『酒史学会』への改称の趣旨

酒史学会は、散逸する史料を収集し、その翻刻による研究という歴史研究の基本に立脚した活動を開始し、成果の社会への還元による貢献を事業目的としました。

20 年間にわたる「日本酒造史学会」としての活動をふまえ、酒造史から酒の歴史一般へと学会活動の幅を広げ、さらには酒の文化史や社会史、風俗や習俗といった民俗と酒について、いわば酒の「造り」から「生活」の酒、「民衆」の酒へと、間口を広げていくことで、今日の要請に応えるように努めています。(後略)

(平成 14 (2002) 年 11 月 16 日理事会資料「酒史学会入会案内書案」より)